

小兵ものがたり

—山椒は小粒でぴりりと辛い—

愛知県 都 築 弥三彦

私は、昭和十一年三月、亀城尋常小学校を卒業いたしました。卒業してからの就職先は国鉄を希望しておりましたが、当時、国鉄では身長が五尺以上でないこと採用されないとのことでした。そこで、身長が伸びるのを期待し、名古屋鉄道に入社したいと思い、名古屋鉄道に在職されている方を通じ、願書を提出しておきました。

しかし、その方が名古屋鉄道の入社試験日を私に知らせてくださらなかったために受験できず、家でぶらぶらしておりましたところ、近所の先輩が、太田商事株式会社に入社しないかと誘っていただいたので、入社希望したところ、同社の印刷部に、同年五月一日より採用されました。

仕事の内容は、印刷物の納品、注文取り、製版の解版や文選などです。私はこの二年間で、文選や解版を通じて文字をしっかりと頭に入れることができ、爾来、字引を引かずに済んだことも再三ありました。それから、この職場の上司に浅岡栄さんという方がおられ、雅号を「秋甫」と号され、俳句の句誌「雁屋」の主幹をしておられましたので、私はこの方について俳句の指導をしていただいたわけであります。

昭和十三年五月に東洋耐火煉瓦(株)に転職しました。一年間ほど現場作業に従事し、その後は給仕として従事しました。当時は戦争中で、昼間は工場で働き、夜間は青年学校に通学しておりましたが、昭和十六年三月、青年学校を卒業と同時に、会社に申し出て四月より、私立名古屋工業学校の機械科に入学いたしました。そして、満二十歳になって、中学一年生となり、八歳も年下の人たちと一緒に通学しましたが、一日も欠席はしませんでした。

昭和十六年に徴兵検査を受けました。

当時の徴兵検査は、隣町の知立町の役場で行われま

した。我々同年者は誘い合つて知立の会場まで片道六キロの道を歩いて行きました。会場に着きますと、憲兵下士官がいて腰の軍刀をガチャガチャ鳴らしながら、我々に対して頭ごなしに注意をされました。

検査結果は甲種合格、第一乙種、第二乙種、第三乙種、丙種、兵役免除の段階に分かれていました。この中で第三乙種は、戦時中から兵員の不足にともない設定されたものであります。そして甲種合格者は胸を張つて喜んでいました。私は背も低く、近眼でやせていましたから、第三乙種となり、最後の部となりました。受験者は検査の結果を一人一人検査官の前で申告して帰るわけですが、最後の私は大声で申告いたしましたら、検査官は第三乙種の私が大声での申告に一瞬びつくりされました。その時の検査官の態度が、昨日のこのように目に浮かんでまいります。

就学して十日か十五日くらいで召集令状が届き、五月五日に中部第二部隊へ入隊しました。営門をくぐり身体検査となりました。私は前記のごとき体格でしたから、検査は一番最後でした。担当の兵隊さんが、私

が計量器に乗る前に、お前は目方があるかと問われ、私は即座に「あります」と答えると、その担当者は、見るからにやせて小さな体の者が思いのほかの大声で答えたので、びつくりされてか、私を計量器に乗せず「よし」といわれ、パスをいたした次第です。

当時は軍隊に行かないものは、非国民呼ばわりされる感があつたので、検査結果から、私はこれで即日帰郷は逃れることができたぞ、軍隊に入ったからには一生懸命にやろうと心に決めました。

さて、七月下旬に衛生兵の教育を無事終えました。私たちは、これからどこに配属されるのかと話し合っていたところ、八月二日に全員中国派遣の命令が出ました。当時は軍の機密で、外地に出発する日時について家族に知らせる手段がありませんでしたが、私は、僚友に電話で知らせてもらい、出陣のとき、行軍しながら、チャリと両親の顔を見ることができました。

名古屋駅より軍用列車にて宇品に向かいました。その時、一人の結婚した同年兵がおられて、奥さんが幼児を抱いて、中央線の列車の後尾の展望台より見送っ

ておられましたので、私は、その人はなんと幸せな人だと羨望の念にかられたものでした。しかし、その方は中国に派遣された直後、戦死されたと聞き及びました。「人間万事塞翁が馬」という言葉が、そのころ私の脳裏を過ぎ去りました。

上海から漢口へ、漢口から廣水まで汽車に乗り、廣水から徒歩で応山（第三師団司令部があった）、さらに応山より湖北省隋県浙河の歩兵第六連隊に到着し、私は直ちに第七中隊に配属されました。

当時は第二次浙贛作戦中であつたため、第七中隊は、留守部隊として馬坪を一個中隊で守備に当たつていたのですが、私よりも半年先任の衛生兵も同時に配属されたため、中隊から私たちを受領に來られた兵隊さんが、私に配属の申告をといわれて、私は何も知らずに申告しましたが、あとで先輩であることが判明しました。しかし、私は先輩より何故か人氣が良く、中隊の人たちや班内の人たち、軍医殿にもかわいがられました。駐屯中は、馬坪において地区民の宣撫班の手伝いと

して、一人で地区内に入り、子供らや地区民に目薬や赤チンで治療をしたり、軍医殿に従つて天然痘の接種や皮下注射を施したり、殊に子供たちに人氣があり、学校へ行つて卓球をやつたこともしばしばでした。

また、つらいことといえば、内務班（指揮班）のことでした。内務班はそれぞれの中隊の中核でした。その業務については、古參兵は一切手を出しませんので、初年兵の私たちが三人程度で、兵器、軍靴の手入れ、班内の清掃、食事の世話、水汲みなどをし、とくに水汲みは、数百メートル隔てた井戸まで醬油ダルの釣り手を付け、それを天秤棒の前後に吊して、毎日五、六回汲みました。時には古參兵がそれを見ていて、事務室に招き入れてくれて、コーヒーを馳走になつたこともありました。

また、一個中隊で一個大隊の警備地区を守備していた関係上、一般兵は人員が不足し、勤務が連続するところがありました。私たちが衛生兵は、不寝番には服務しても、銃前哨には服務しないのが原則でしたが、時には銃前哨にも服務いたしたこともありました。

それから時には、銃剣術、射撃等の訓練にも参加しました。

また、あるときは、駄馬部隊の馬の疝痛の治療のために駆り出され、馬に注射を打ったこともあり、その折、横になっている馬の首に脚側より注射をして、脚で蹴飛ばされた苦い経験もありました。

人間は窮地に至れば、その事象に対して、臨機応変に対応することができません。私は今になって思うことですが、初年兵時代に、馬坪において体験したいろいろな出来事が、私のその後の人生にとつての対応の基礎を築いたように考えられます。

私が参加した作戦は、常徳作戦と湘桂作戦であります。

まず、常徳作戦は、雨期で幾日も雨天が続きました。行軍中は、民家の土間で藁を被つて就寝しました。その時に藁に残っていた粉の棘が、私の右の人指し指の先端に刺さり、化膿してきました。しかし、初年兵の私は飯盒炊さんをやらなければならず、常に包帯は水で濡れていましたので、傷は悪化するばかりでした。

そこで、行軍中の休憩時に軍医殿に傷を見せますと、これは「ひょうそう」通称指病みだといわれ、直ちに私の右人差指の爪をハサミで二つに切り裂き、その爪の一片ずつをピンセットで引き抜かれました。

そのときには、いくら我慢強い私でも、思わず声を上げました。もちろん、抜くときは、麻酔薬の注射はいたしませんでした。したがって爪を一片抜くたびに目から星が出ました。昔から「目から星が出る」といいますが、私はこれは本当だと思いました。この痛さは、前にも後にもありませんでした。後に湘桂作戦中に、左上膊左前胸部貫通銃創を受けましたが、痛さについては、この生爪を剝がされた方が数倍の苦痛でありました。

軍医殿はその後、私の「右指の第一間接から切断しよう」ともうされましたが、私は軍医殿に懇願して、そのまましてもらいました。その後は、私の右人差指は生えてきません。そのとき、軍医殿に冗談に「爪を引き抜かれたときは、軍医殿の顔が鬼に見えました」と申し上げた記憶があります。

そして、マラリアから脚気を併発し、高熱と脚の浮腫がひどく、行軍に耐えられず、入院しました。その後、上海の陸軍病院まで転送され、衰弱のため、内地へ後送というところまでいきましたが、以後、幸いにも体力が回復したため原隊復帰ができました。

湘桂作戦には沢山の思い出がありますが、作戦間のこと、日時及び場所の記録が表記できませんが、私の心にやきついたものを書いてみます。

まず隋県を出発するときは、甲編制（中隊長以下二〇名）であったのですが、我々の中隊長どのは大変に優秀であったため、いつも我が中隊は尖兵役を承りました。尖兵は敵と遭遇することが多いために、隊員の消耗も激しく一カ月から二カ月の間に戦死、負傷、病気等で要員は半減してしまいました。私の先任の衛生兵も頭部負傷により後送されてしまいました。

例によって、我が中隊が尖兵中隊として丘陵地を行軍中突然前方より敵が銃撃してきました。我が中隊は直ちに応戦態勢に入りました。いつもなら敵はすぐ退却するのですが、この日は、敵も簡単に退却しません。

長時間の戦闘の間に夕食の飯盒炊きんをしておかねばなりません。そこで非戦闘員の私が、この飯盒炊きんの責任者となりました。私は兵を五名ほど連れて敵の見えない山陰にて炊きんをすませて中隊に戻るために、兵の一人一人と飯盒を両手に三個ずつ持って、一人しか通れない山道の崖道を遮蔽物のあるところまで（約百メートル）一気に走りました。もちろん、敵はこの百メートルの間を走る我々を狙って射撃してきます。私は兵の一人一人に、敵の狙撃を避けるため、間隔を見計らって「行け」と号令を掛けて走らせました。

兵が走る度に敵弾が崖道に土煙を上げましたが、四人は無事に難所を突破してくれました。残った一人の兵にも、他の兵隊と同様に、駆け出したら止まらずに一気に走るよう再度言い聞かせて、私が「走れ」と号令を掛けました。ところが敵がすかさず射撃してきました。途端、その兵は五〇メートルも走ったところで立ち止まってしまいました。私は最後に駆けていきましたら、その兵が走りませんので、つきり負傷したものだと思い、その兵の側へ行き「やられたのか」とい

いますと、その兵は別に負傷はしておりませんでしたので、私は例の大声で「早く走れ」とその兵を走らせて、遮蔽物のあるところまで辿り着き、その兵になぜ敵が狙撃してくる場所で立ち止まったのだとの詰問しますと、その兵は無言でふてぶてしい態度でしたので、私はついにその兵に「びんた」を食わせました。

軍隊は、命を賭けての運命共同体でありますので、当方の損傷を少なくして相手をいかに多く殲滅させるかということですので、上意下達、服務規則の遵守はいたさねばなりません。自分一人くらいはよいだろうと、勝手な行動や横着に構えることは全員の命に重大な影響を及ぼすからであります。一人の疾病、負傷、戦死が、戦力を著しく低下させることは言をまつまでもありません。このような観点から、私はやむを得ず制裁に及んだわけでありませぬ。現代の民主主義の世代においても共通することではないかと思われませぬ。私は入隊以来、兵にビンタを食わしたのは初めてであり、この時以外は前にも後にも一度もありません。なぜかといえば、私はたびたび、理由の分からないときや、

他人の所為で「びんた」をもらいました。その都度、大変腹が立ちましたので、私は、下位の兵に対しては決して同じ思いをさせたくないと心に決めていたからであります。

また、われわれが尖兵で戦闘しているとき、後方の駄馬部隊はクリーク（池）の水を落として魚を捕らえていることもありませぬ。その代わり山岳地帯を行軍するときには、駄馬部隊は重量荷物を分散して行軍しなければなりません。その点、歩兵は身軽ですので、短距離の行軍ですみますので五十歩百歩ということですよ。

また、同年兵のラツパ掛の上等兵らが、薄暮攻撃で敵のトーチカの銃眼に擲弾筒を打ち込む作戦が計画されていまして、その行動を起そうとしていたときのことでした。その近くにいたある初年兵が、指に軽傷をし、その際、大声で「やられた」と叫んだため、トーチカのすぐ前面にいた上等兵は機関銃で胸部にミシンを掛けたごとく二列に袈裟がけに撃ち抜かれてしまいました。その死体を私は検死しましたが、あまりの弾痕に啞然とすると同時に、軽傷だった初年兵の無気力

に一時、腹が立ったことを忘れることはできません。もちろん、その初年兵の指の傷も治療しましたが、表皮が向けた程度のものでした。

私たち一般の兵にはよく分からないことでしたが、わが一個中隊で、敵の一個師団の退路を遮断した功績は、第十一軍の軍感状ものだと聞かされたことがあります。それはわれわれ中隊といつても、前記のごとく消耗が激しく半分の要員しかおらない戦力でした。その夜、行軍で移動していくと、すぐ目の前に敵の駄馬部隊が荷物を馬につんでいるところでした。こちらは敵より少し高地の田圃の中から、全員が立ち撃ちの構えで夢中で射撃をしました。

ふと見ると、中隊長殿自ら、部下の兵の軽機関銃を取り上げて腰だめ射撃をしておられました。

しかし、多勢に無勢で時間が経過するうちに、敵は我々より高地に上がり射撃をしてくれました。この戦闘で我が中隊は、戦死者、負傷者合わせて二十三名の多数の犠牲者を出しました。私は衛生兵ですから銃は持つておりませんので、どうしようもありません、見て

いると、敵もなかなか勇敢なもので、チャルメラのようなラッパを吹きながら突進してきます。これを射撃すると、ころころ転がって落ちていきますが、次から次からと突撃してくる様は、日本兵となら変わらなうと思いました。

また、敵はチェッコ機関銃で射撃してきます。敵は行軍中は銃を一般の兵が持ち歩き、いよいよ戦闘となると、銃は専門の射撃兵に手渡されて射撃をしてくるから命中率は良いわけで、我が中隊の被害は甚大となりました。私は、たしか朝から午後四時まで、昼食をとらずに戦死者、負傷者の処置におおわらわでした。あまりにも一度に多くの犠牲者が出たので、これに対応する衛生材料も底を尽き、もちろん、骨折に添える副木もありません。しかたなく松の木を帯剣で叩き切ったりして添え木代わりにしました。一人で二十数名の負傷者の手当は、筆舌に尽くしがたいほどでした。したがって、わが中隊の功績は大きいですが、その代償もまた甚大でありました。

次に、ある戦闘で腹部貫通銃創を受けられた古参兵

の方が班内におられたのですが、私たちは最前線であったので、その古参兵の方の後方輸送もできない状況でありました。私は傷口を見て、この方はもう助からないと思いました。その方が、私に「この缶に煙草が少し入っているから、これを班の皆さんに差し上げてください」といわれたことは今でも忘れることのできない一言であります。もし、この場所が内地であれば、手術をすれば生命は取り止められるのに、甚だ残念なことであります。

私は衛生兵ですので、戦闘が始まると、いつでもけが人が出ないことを祈っております。特に夜間の戦闘で、闇の中で傷の手当をするわけですので、こちらではどこを負傷しているのか分かりません。灯を付けての手当はできない状況下であります。したがって「どこをやられたんだ」と尋ねますと、「左腕をやられた」と訴えますので左腕の手当をしておきますと、右腕の出血多量により失敗したこともあります。何故かといえば、右腕が貫通し左腕が擦過した場合には、本人は右腕は麻痺していて痛みが感じられず、左腕は

擦過のため皮膚が焼けて疼痛が生じるため、左腕をやられたと申します。そこで失敗が起きるわけです。

また、私は突撃命令が出ますと、帯剣一本で突撃するためかいつも脚がぶるぶる震えたものです。しかし、しばらく走れば震えは治りますが、不思議な現象でした。

中隊長殿の戦死については、渡河作戦後の出来事です。この渡河作戦は、われわれ尖兵中隊が最初にこの川を渡るわけがありますが、橋は爆破されており川の中に入水して渡らなければなりません。水深も身長以上あり、流れも早いので、我が隊は渡河点を探索しなければなりません。日中は敵の集中砲火のために探索ができません。夜まで待つて、ようやく渡河点を見付け、夜陰に乗じて渡河しようと川岸に集合しましたところ、直ちに敵の銃撃に遭い、ここで分隊長殿が負傷されました。

渡河点といっても胸までの水位があり、早い流れのため、我々はお互いにしつかり手を取り合つて、やつとの思いで渡河することができました。渡河後は川岸

で露営をしました。そして出発して間もなくのことでした。昨夜の渡河戦のことを振り返りつつ行軍をしておりましたところ、私のわずか一メートルか二メートル前を歩いておられた中隊長殿が突然ふらふらとされましたので、駆け寄って中隊長殿を抱き止めますと、流れ弾が中隊長殿の頭部を貫通し、一言もなく立派に戦死されました。この中隊長殿は、兵隊間にも信望の厚い方で、しかも作戦計画にも大変優れた方だったため、我が中隊が嚇々たる武勲を立てることができると思います。この中隊長殿の戦死は実に残念至極でありました。

私自身の経験ですが、私はマラリアの罹患者であつたため、四〇度の高熱をだしながら食事は少しも口にせず、朝詰めた飯盒を背負つたまま目的地まで行軍を果たしたこともありました。また、私は常に戦闘で戦死者が出ますと、私が主となって短時間のうちに戦死者を茶毘に付し、その「お骨」をいつも胸に二、三体掛けての行軍となりました。長時間の逗留時にはこれらの遺骨は後送されますが、次の戦死者が出ますと、

私は同様に遺骨を抱いての行軍をいたしました。このような苦しいとき、私はいつも「憂きことのなほこの上に、積もれかし、限りある身の、力ためさん」の和歌を無言で口ずさみ、自らを励ました。

そして目的地に着けば、私たち衛生兵は、怪我や病気の人たちに治療や投薬をするのですが、自分自身が高熱が出て食事も食わずに行軍して宿営地に着いた場合、だれ一人薬もくれません。こんな時には「衛生兵はつまらん」と心ひそかに嘆いたこともあります。また、夜遅く野営したときなどは、飯盒炊さんのとき使った池の水を翌朝見ると、敵の腐乱死体が浮かんでいたこともあつたし、赤土の赤い色の飯を食べたこともありました。熱いときは、行軍中の汗が髭について白く乾いた塩が浮いていることもあり、連日行軍しますと、体調を崩した者が落伍します。そうすると、同じ班のものが二名と我々衛生兵が後に残り、その落伍者の荷物を分け合つて本人が負担する兵器や荷物を軽くして本隊に追従するわけです。したがって落伍者の荷物の中で、当座不要のものは棄てざるを得ません。

例えば齒磨粉、齒ブラシなどは捨てたこともありました。

時には軽機関銃を兵隊に代わって担いだこともありましたが。その場合は本隊より数時間遅れての到着となります。しかし、私は衛生兵として直ちに中隊中の隊員の治療や投薬に各班内を見回らなければなりません。このような勤務状態ですので戦闘中は、衛生兵は歩哨や銃前哨などの勤務には就きません。また敵機に備えて夜行軍も行われますが、夜行軍は昼間睡眠が不十分となりますので体力が消耗します。夜行軍が二週間も続きますと体重が二〜三キロ減ってしまい、眼光が鋭くなつてまいります。

また、前記の落伍者のことについて触れてみますと、落伍者は体力のないものですので、前日の落伍者が今日は元気とはならないわけで、さらばといつて行軍中では後方の病院に後送する兵員もありません。行軍が続くわけでありませう。声で励ましたり、しかつたりしても本人が歩いているうちは生きていますが、手製の担架の上に乗せてしまうと死亡することもありました。

昭和二十年四月九日夜、駐留地の万嘉坪付近の新村の討伐に出掛けました。夜行軍で敵状の關係で田圃の中を歩いたりして難行軍になりました。一夜が明け四月十日の早朝部落に着きましたら、その部落に敵がいて戦闘となりました。銃声がして間もなく「やられた」と声がしました。だれかと問えば指揮班の古參兵とのこと、私は早速救護に向かおうとしましたが、中隊長から、手の合図で至近距離のため救援は難しいからしばらく待てができました。いらいらしておりましたところ、また部落の中で「やられた」の音が聞こえたため、私は躊躇せず前記の古參兵の救護をするために家陰から一步出ました。途端、私は左腕を棍棒で強打されたという思いがよぎりました。私の左腕はみるみるうちに紫色に腫れ上がり、口より出血したため、数歩歩いて倒れてしまいました。すぐに隊員たちが私を囲んで「衛生兵がやれてしまった」と大騒ぎとなりました。そして、みんなで私の傷の手当をしようと思いましたがその時、私はこう申しました。私は「左腕を撃たれ口から出血しているから、もう助からないと思

うから、前線で医薬品が欠乏している折だから、手当をしてもしなくてもどっち道私は死ぬのだから手当はしないでくれ」と頼みました。

もちろん、私と他の兵隊も同様に私の三角布はポケットに入れていましたが、だれも私の傷の手当はしな
いままでした。そして私は遺言のつもりで准尉さんに
対して「私もとうとうここで戦死することになりました
た。私には、両親と軍務に服している弟が一人おりま
すので、私のこの時計を形見として弟に届けてやって
ください。それから両親には立派に戦死したと伝えて
ください」と頼んで地面に倒れたままいました。

廣西省の四月です、もう蚊もいましたし、服装も夏姿でありました。私は苦しくなってきたら「天皇陛下万歳」を叫んで死のうと考えておりました。昨夜より食事も取っておらず、腹が減っていたので食事を要求しましたが、口が渴いて、食事はできませんでした。私は倒れたまま寝入ってしまい、目を覚ますと、他の部隊の軍医さんが、私に止血注射を打ったり手当をしてくださっていました。そして戦闘の中を担架に

乗せてもらい、百キロも離れた野戦病院に入院させてくださいました。

今回負傷したことで私は靈感というものがあるのではないかと思いました。ということ、私が負傷する前日に部下の衛生兵を医務室に集め、こと細かに申し送りをしておきましたし、私の身の回りのもの、軍装もきちんと整理をしましたし、私は今でも幾多の戦死者、負傷者を扱ってまいりました関係上、死ぬときは新品の褌をして、新品の靴下を着けて茶毘に付してもらいたいと考えていましたので、前記のようなことができました。入院時には身の回りの品も私が梱包していた関係上、すぐに対応ができた次第でした。私は、動物が天災を事前に察知するように、人間にも予感というか、靈感というものがあるのではないかと思うようになりました。

このことにつきましては、私が復員後、母と語り合ったとき、母親が私が負傷したところに私が病衣姿で母親の夢枕に立ったので、母親がよく帰ってきたねといいましたところ、私が母親に対して一言も語らなかつ

たため、母親がてつきり戦死したのではないかと思つていたと申していました。入院後は左腕は麻痺して左手はつかえず片手で生活してきましたし、前線の野戦病院で薬品や食糧も不足がちで傷口は数日間も治癒しないため、蛆が発生し悩まされたこともありましたが、幸いにも大事に至らず、三カ月くらいで傷口は塞がりました。

ここで捕虜生活を三カ月半ほどしましたが、中国においては戦中も戦後もたいした変わりもなく、我々を監視する中国兵はとくに我々に不快な態度は示しませんでした。それでも町に出掛ける場合は自分より上級者には敬礼をするように申し渡されていました。また聞くところによれば中国の蔣總統は、日本は負けたが、中国は勝ったわけではないと軍人に伝えていたとか、ただ、捕虜生活では食糧は満足すべきものではありませんでした。

俘虜の身の おもいで通し 寒の月

鎮江から移動し、昭和二十一年一月二十六日、上海

で米国のリバティー船に乗船しました。乗船のとき米国旗に敬礼してから乗船しましたが、なんとなく違和感がありました。一月二十九日に佐世保に上陸し、検疫をすませ、中国より持ち帰ったこめで飯盒炊さんをして、にぎり飯を作り、南風崎はえのさきより汽車に乗り一路家路に向かいました。汽車の中は満員で身動きもできないほどであり、途中、広島や阪神地区などの戦災の惨状を汽車の窓から眺めていました。また国民からねぎらいの言葉も湯茶の接待もなく名古屋駅まできて、この汽車は刈谷駅には停車しないといわれ下車をしましたが、名古屋は灰燼となり全くの焼け野原でした。ここにいわせれた人に刈谷はどうですかと尋ねると、刈谷では家は一軒も建っていませんよといわれ、中国米の固いにぎり飯も大切にしなければと思いました。

刈谷駅に着くと別に戦災にあった様子もみられず、三河線に乗り換え、刈谷駅より家路へ急いだが、自分の家に帰るまで心の中には不安が付きまといまわりました。さて、自宅の前に立ったとき、私はなんと小さな家だなあと思いました。

私は入隊時は、四二キロの体重で虚弱にもかかわらず、いかにお困のためとはいえ、非衛生的な中国大陸に戦争という非人道的な人が人を殺すということに駆り出され、幾多の仲間を失い、また病氣や負傷したりしても無事復員できました。私は、中隊の戦死者や戦死者の状況を把握している一人で、幸いにも九死に一生を得て帰ってこられたのだからせめて、その状況報告のため「戦死者のご仏壇を拝みたい」と家庭を訪問しましたところ、大変に喜ばれたと同時に遺族の号泣される姿に接して、乃木將軍ではないが、自分は生きて帰ってきて申しわけないような気がしてきて、事後はぶつくり戦死者宅の訪問をやめました。

最後に私は、軍隊生活を通じて「死んだつもりなら何でもできる。何事も継続が大切だ。最後まで諦めない、自分が苦しいときは他人も苦しいのだ。努力の後には運もついてくる」という最も貴重な教訓を体験することができました。

終戦後五十年の節目を迎える年にあたり、私は、軍隊生活の一部を書き残すことにより、戦争の残酷さ、

悲惨さ、愚かさを再認識し、戦争はすべきでないということを後世の人に伝えるために、私の体験が少しでも役立てればと思いつき、筆をとった次第であります。

【解 説】

執筆者は自ら「小兵」と称しているが、内容は正に山椒は小粒でびりりと辛い、いわゆる、真面目一途の張り切りボーイであったことが窺い知られる。この旺盛な精神力と体力が同氏を死から救ったのであろう。軍隊の戯れ言葉に、軍隊で楽なのは「通信、ラッパ、ヨーチン、……」というのがある。どれが一番でどれが二番であったか忘れたが、古い兵隊が言っていたのを聞いた記憶がある。しかし、軍隊の勤務、任務というものは、そんなに生易しいものではない。

執筆者は「ヨーチン＝沃度チンキ」といわれた衛生兵である。名古屋の第三師団歩兵第六連隊入隊で、中支へ到着した時は浙贛作戦で出動中とのことである。昭和十六年四月、米軍のB 29爆撃機が、航空母艦から飛び立ち、鹿島灘から帝都に小型爆弾や焼夷弾を投下

した第一回の本土空襲（いわゆるドーリットル空襲）があった。被害は僅少だが、軍・官・民に与えた精神的打撃は大であった。

それら米軍機は中国中部、中支の重慶軍飛行場に着陸したのである。そのため中支の浙江省、江西省の重慶軍飛行場を覆滅、占領するために浙贛作戦が発起された。主力は第十三軍であるが、第十一軍の第三師団歩兵第六連隊も参戦している。

次に都築氏が参加した常德作戦の概要を記す。

常德殲滅作戦は第十一軍が主力で、第十三軍の第一百六師団（嵐兵団）等が指揮下に入り、湖南省の常德及びその周辺地域の敵軍撃滅等を目的として行われた作戦である。また、この作戦は、第十一軍司令官横山勇中将の頭文字をとって「よ号作戦」とも称された。攻撃発起は昭和十八年一月初め、終了し原駐地に帰還したのは十九年一月である。

常德は「湖南実れば四川飢えず」と昔からいわれた穀倉地湖南省の東部の長沙に対して、西部では軍事、

政治、経済の中心は常德であった。この地方は重慶政府の補給の命脈にかかわる重大都市である。我が軍がこれを占領すれば四川省の重慶を窺う戦略上の要衝である。

第六連隊は第三師団（幸兵团）の基幹となり、中畑連隊長指揮のもと、十一月二日夕、第一線を以て攻撃前進、第三十四、第六十八連隊と共に九日ないし十日夜、所命の地点に進出、重慶軍第一〇、第二九集團軍の分断突破に成功。主要戦果は遺棄死体九七九、俘虜三六一、重機関銃二一、軽機九。我が損害、将校一を含め戦死三三、戦傷八一、馬匹戦死一〇等であった。第二期作戦では、石門において敵第七三軍を殲滅。戦果は遺棄死体一、三六三、俘虜一三八、兵器多数。我が損害、戦死将校一を含め戦死五六、戦傷一三七、馬匹戦死五三等であった。

常德攻撃の主力は歩兵第六連隊、野砲第一大隊であった。十一月二十五日、軍から「中畑部隊Ⅱ歩兵第六連隊 二四時ヲ期シ常德ヲ攻撃スベシ」の命を受け、一応部署を終わったが、一〇時ころ、築場大隊長はト

イチカよりの射撃で右腕貫通銃創、中原連隊長はP-40、二機の機銃掃射を受け、壮烈な戦死を遂げた。そこで負傷の築場大隊長が連隊長代理となり予定通り攻撃準備をした。渡河した第三大隊の各中隊は城壁接近の死闘を繰り返し、二十六日黎明のころ、東門付近城壁に三本の日章旗を挙げ常德城を占領した。

さらに十二月三十日、師団は敵の側背後から急襲し、金鱗橋付近の殲滅戦を展開、また常德南地域を掃討した。その主たる戦果は、遺棄死体一、九五八、俘虜一九九、砲三一、重機一二、その他である。我が損害は、戦死一八、戦傷六一、戦死馬九。師団が交戦した敵一三、〇〇〇（第一〇軍主力、第五七、第六三師団）。

第十一軍は十二月十一日、反転を開始したが、在支米空軍の日本本土への空襲は今や実行の段階に入ったので、十一月二十八日、支那派遣軍に「大陸打通作戦」京漢、湘桂作戦」実施に関し大本営の意向を伝えた。湘桂作戦は昭和十九年五月二十六日発起となり、第十一軍は第二十軍、第二十三軍は第六方面軍の隷下となり、第三師団は第十三師団と共に第十一軍の戦闘師

団として貴州省まで進撃し、蔣政権崩壊寸前まで追い込んだが、連合軍の本土上陸、支那大陸逆上陸の危機により二十年五月撤退を余儀なくされ、ついに終戦となるのである。

都築氏は湘桂作戦の思い出、撤退前の四月の負傷につき書かれているが、湘桂作戦に対しての解説は多くなされているので他へ譲ることとする。しかし、内地での衛生兵は医務室勤務であるため、朝、中隊を出て行き夕方帰る、とさながら楽な任務に見えるかと思えるが、そうではない。特に戦地においては、消化器疾患、赤痢、粘血便、下痢患者は続出、四〇度の高熱と悪寒に悩まされるマラリア、呼吸器疾患、まず頼みとするのは衛生兵である。

また、宣撫工作の最大の担い手は衛生兵である。戦闘となると、戦闘要員ではない衛生兵は短剣一本で行動しなければならぬし、負傷者、戦死者が出れば「衛生兵前へ」の命令がある。敵弾雨飛の中で負傷者の手当をし、後方へ下げる。まず一番先に直接患者に接す

るのは衛生兵である。負傷者にとつても、戦闘員にとつては助けの神と頼られるのが衛生兵であつた。自ら負傷した都築氏の衛生兵魂があつてこそ、衛生兵は兵から頼られる小隊の軍医なのである。

応召、大作戦に参加、 労苦の思い出

愛知県 吉田新一

昭和十二年八月、支那事変勃発、毎日のように応召があり、わが村からも次々とお国のために出征兵士を送り出した。昭和十六年には大東亜戦争に突入、翌年十月十四日に令状を受け、二十八歳で初年兵として輜重兵第三連隊に入隊、第二中隊隊員で、毎日の訓練に苦労した。

いよいよ五十五日の検閲。早朝五時出発、名古屋の東山より守山小幡ヶ原と演習し、夕方五時帰隊、一通りの検閲は終了した。秘密裏に中国方面に出征するこ

とになり、二日間の休養で私宅に帰り、いつ出発するか秘密であるため連絡はできないが「出発間違いなし」と誓い、留守中は皆元気で暮らすようにいつて帰隊した。

十二月十七日、中国幸第三七一一部隊に向かつて真夜中に部隊を出発、機密の中にもお見送り多数。名古屋駅に向かつていた途中、納屋橋にて小休止、親戚衆一同のお見送りを受け、名古屋駅より列車に乗り宇品港に到着。十八日に出港、波高い玄界灘では二十分後に大波が打ち寄せ、三千名乗組みの輸送船も木の葉のようで前に進めず、全員船酔い、食事を取る兵はほとんどなし。約十時間後に前方に島が見えてきた。おそらく想像した釜山港でした。

上陸と同時に貨車に乗り北支回りのため、夜中に小便がしたくとも戸は開きません。北支の十二月は零下何十度で戸は凍りついています。貨車の中で用便を済ませた。夜が明け、日が射してくると貨車の屋根より凍り付いた氷が溶けてポツポツと落ちてきた。着いたところは浦口の港。夕方、対岸の南京に上陸、城内で